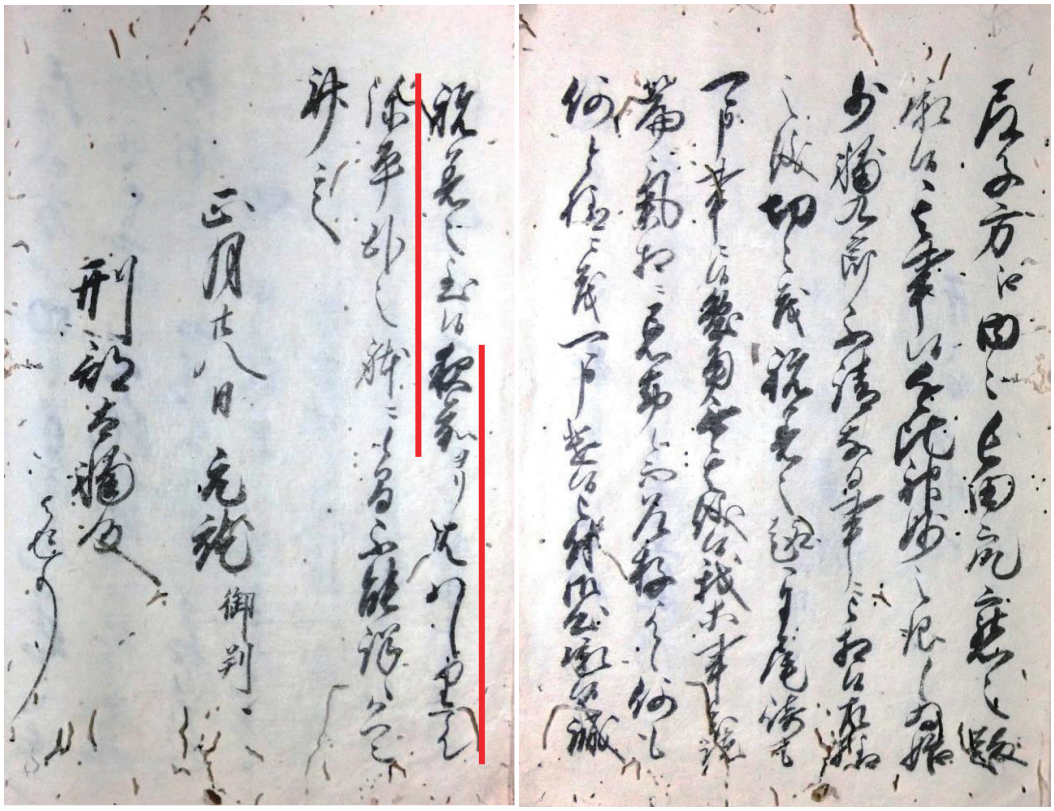


「毛利元就書状写」（閥閲録差出原本 522　内藤二郎左衛門）

いやすなおすたもつ

文書館資料にみる
病気・医療・健康

8

病気と祈り①

毛利元就の歯が「走る？」

永禄９年（1566）に毛利氏は長年の大敵であった出雲の尼子氏を攻め滅ぼします。その時に降参した尼子義久兄弟を毛利氏は丁重に扱い、配下の内藤氏に彼らを警備させます。内藤氏は自らの所領である安芸国長田（現、広島県安芸高田市）内の寺院を義久らの居館に宛て、厳しく監視するかたわら、何かと心配りをしています。

毛利元就や嫁の隆元夫人は、そういった内藤氏の気遣いをほめようとしますが、なかなかその機会がありませんでした。

そこで、毛利氏重臣の口羽通良が気を利かして、内藤氏に元就の意向を伝えたようです。

この件に関して、永禄 10 年（1567）正月に元就は口羽氏に手紙で謝意を伝えています。ところが、この頃元就はあることに苦しんでいました。

口羽氏宛ての手紙（上の写真）本文の終わりから２～３行目に注目してみましょう。「夜前ヨリは（歯）ハしり（はしり）候て、いよいよ平臥の躰ニ候」と書いてあります。山口県やその近県出身の方ならたぶんおわかりではないでしょうか。「歯がはしる」とは、「歯がひどく痛む」という意味の方言です。つまり、元就は、このとき「昨夜から歯がひどく痛むので、臥せっている」という状態だったのです。

このことを裏付けるかのように、現在は所在不明となっている原文書（個人蔵）の元就の花押（本人が書いたサイン）は、筆が乱れ、同時期の花押に比べると弱々しいものになっています。

「歯がはしる」云々の一文がなければ、この花押を見た口羽氏は、この手紙は本当に「大殿」（元就）からのものだろうかといぶかったことでしょう。

歯痛に苦しんでいた元就が、臥せった状態で、（もしかすると片手で頬を押さえながら）右筆が用意した手紙に一生懸命に花押を書いている姿を想像してみてください。元就には気の毒ですが、何だか笑ってしまいそうです。

毛利元就卿画像（軸物類 170）

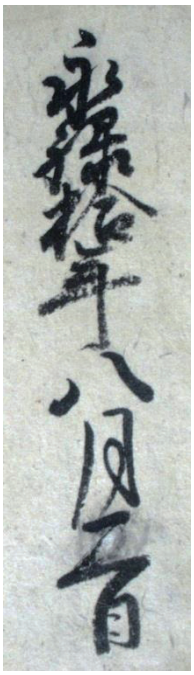
「酒は百薬の長」という言葉があるように、適度な飲酒は健康に良いとされます。一方で飲みすぎると健康を損ない大事にいたるのも事実です（酒害）。

元就は、この酒害をよく認識しており、酒を慎んだ（あるいは下戸だった）ため、当時としては長寿の 75 歳の生涯を全うしました。

というのも、彼の祖父は 33 歳、父は 39 歳、兄は 24 歳で、いずれも酒が原因で亡くなっていたからです。そのため孫の輝元が酒を飲み始めると、その母親に宛てて、酒を控えさせるように言い送っています。その指示は、お椀の大きさごとに酒量を決めると言った細かいものでした。

毛利元就書状写

尼子方江内々長田衆懇之趣、（内藤氏）
承候、其事候、近頃神妙之儀候、為始
少輔九郎不請なる事ニ被相候、左様（内藤元泰）
之儀切々茂祝着之趣、自尾崎も（毛利隆元室）
可申事ニ候、菟角無其儀候、我等事茂諸
篇気相ニ忘却候而乍存にて候、何も
何と様ニ茂可申遣候、被付御心承候、誠
祝着之至候、夜前ヨリはハしり候て、
弥平臥之躰ニ候間、不能詳候、恐々
謹言、
（永禄十年）
正月廿八日　元就 御判
（口羽通良）
刑部太輔殿
御返事



同じ頃の毛利元就の花押